

う。

豊富な知識に裏付けられながらも、無駄のない、流れるように読める文体で語られる「考える親鸞」。この本は研究書としてのみ読むことは許されない。今までの自分の人生を振り返るように要求する本である。近代仏教が学術の世界にとどまることなく、今なお躍動し続けていることをこの本は証明してみせている。

(二〇二二年一月刊、B六判、三三九頁、一四五〇円＋税、新潮社)

飯島孝良

語られ続ける一休像

——戦後思想史からみる禅文化の諸相

石井公成

本書は、多様な面を持った室町時代の禅僧、一休宗純(一三九四～一四八一)がいかに語られ続けたかを検証した力作だ。一休は奇矯な言動で知られており、生前から様々な逸話が語られていたうえ、江戸以後は頼知の一休さんとして親しまれてきた。しかし、戦後になると、権威・体制を批判した自由人、遊女屋の多さを批判する一方で自らは愛欲にふけるなど、矛盾し

た面を抱えた大胆な行動者としての側面が評価されるようになってくる。

そこで飯島氏(以下、「著者」と称する)は、従来の伝統的な一休観、および昭和初期から戦後にかけて一休を評価した知識人たちをとりあげ、かれらが語る一休像を詳細に検討してゆく。一休はどのような人物であったかを解明し、そのうえで戦後の知識人たちの一休像がどのような特色を持っているかを示すのではない。あくまでも、世間で語られた一休像や戦後知識人たちが描いた一休像を対象とし、その人がどのような背景のもとでどのような一休像を語ったかを明らかにしていくのであって、その作業を通じてその知識人の特徴が浮かび上がり、またとらえにくい一休のいろいろな面が明らかになってくるという仕組みになっているのだ。

本書の構成は以下の通り。

まえがき 日本人を魅する「面構え」——個人的な体験から

序論 一休の〈像〉は如何に形成されてきたか——室町期から戦後日本へ

はじめに

一 何故一休なのか——その〈像〉研究の意義

二 一休宗純の生涯——その素描

三 一休〈像〉の形成過程

四 一休の〈像〉という媒介を通して何が語られたのか

——「伝統」と「近代」

おわりに

第一章 一休像の近代的「発見」——前田利謙の「禅」を手がかりに

はじめに

一 前田利謙の立場と問題意識

二 「一所不住の徒」一休への眼

おわりに

第二章 戦後日本における中世禅文化論と一休の像——芳賀幸二郎を中心た

はじめに

一 芳賀幸二郎の着眼——戦後における一休論の嚆矢として

二 芳賀の問題意識と一休の像との対応関係——学術的問題と実存的問題

三 「東山文化」論と一休の像

おわりに

第三章 市川白弦の一休像——「即」の論理の批判的継承として

一 市川における問題意識

二 「即」の論理と「風流」——市川における一休の像

おわりに

第四章 二十世紀の「禅学」と一休像——柳田聖山の視座を再考する

はじめに

索引

あとがき これまでとこれから——一休を通して「禅文化」をたずねるといふこと

索引

以上だ。冒頭で述べたような内容であるため、「序論」の副題は「一休の〈像〉は如何に形成されてきたか」となっている。

これは、實在人物としての一休の存在を当然視し、その実像と後代の知識人による一休「像」の落差を検討するといった語り

方はありえなくなっていることを、戦後の禅宗研究の方法論の変化・進展と重ね合わせながら論じるためだ。著者は、伝統は過去に創造されただけでなく、現代において新たな意味や価値を付加することによって歴史が形づくられていくとする三木清の主張に賛同し、西欧における「史的イエス」研究の変化や、日本の宗祖像の研究の変化に触れたうえで、議論の前提となる「休の生涯と当時の状況について概説している。

そのうえで、多くの人々が描いた「休の「像」を簡単に紹介し、敗戦後になって本格的に言及される「休の「像」は反体制的な傾向があり、従来の「とんちの「休」のイメージと違って、批判・反逆・破戒・エロスなどの面が強く押し出されていることに注意している。その際、「「休像」なるものに取り組むにあたっての注意点が詳しく論じられ、以後の章で論じられる前田利鎌・市川白弦などの「休像」についても概論しているため、「序論」だけで全体の三分の一弱を占める結果となっており、バランスは悪い。

第一章は、近代的な「休像」を示した戦前の前田利鎌が紹介されている。利鎌は、西洋哲学を学ぶと同時に、臨済宗の師家について参禅し、剣道にも打ち込んだ秀才だ。荘子や臨済や「休」について新鮮な見方を提示して戦後の知識人に影響を与えた人物だけに、利鎌の人物像を生き生きと描き出してその禅宗観を明らかにし、「休」の近代的な面を発見した意義を指摘したことは重要だ。ただ、気にかかるのは、荘子の説く相対的対立を越

えた「至人」「真人」は、「まさに臨済のいわゆる『随処に主となる』絶対的自由人である、と利鎌は規定する」(二二七頁)という断定だ。「随処に主となる」とは、「処に随いて主となれば、立つ処、皆な真なり」(どの場にあっても主体となれば、立つ場所がすべて真実だ)という『臨済録』の言葉であって、著者はそうした人間を「絶対的自由人」と呼びかえている。

しかし、「随処に主となる」というのは、仏教界の戦争協力を厳しく批判した市川白弦が、戦時中に時勢に流されて軍国主義をあり、戦後は約変した禅僧たちを批判する際に転用して用いた言葉でもある。白弦は、彼らは「随処に主となる」と称しながら時勢に流されるばかりであって、実際には「随処に従となる」ものでしかなかったと評した。休はそうしたタイプではなかったが、白弦の研究者でもある著者は、本書第三章で白弦を論じる際、戦時中の禅に対する白弦の批判について、

「即非」の論理、すなわち不自由即自由、「随処に従となる」こと(聖戦における滅私奉公)が「随処に主となる」こと(大乘禅)だといった看方が、西田幾多郎のいわゆる「絶対矛盾の自己同一」の論理と同一視され、それが社会的・政治的役割を果たしてきたこと。(二二四頁)

という点をあげている。利鎌も白弦も著者が共感をこめて描いている人物である以上、この白弦の指摘を無視して「随処に主となる」という句を無条件で認め、そうした姿勢を、著者が高校以来親しんできたという西田哲学の匂いが感じられる「絶対

自由人」という言葉で言い換えて良いものだろうか。白弦は西田の「絶対矛盾の自己同一」の論理が結局は大東亜共栄圏の擁護に帰着したことを批判していただけに、なおさらのことだ。

著者は、利鎌について「臨済や荘子から見いだされた『自由』の体現者として「休」を取り上げ」たとし、「近代的視座から『禅』を受容した」(九三頁)と述べていることが示すように、利鎌は没後の遺著である『宗教的人間』では「自由」の語は用いているが、「絶対自由」という言葉は用いていない。著者は、休自身ではなく、戦後知識人たちの「休像」を扱うはずでありながら、他の章でもこの「絶対自由」「絶対自由人」という言葉を「休の実像扱いし、大前提として用いている。近年のテキスト研究の方法論に基づく有益な検討をしておりますながら、休を様々な矛盾の束縛を超えた「絶対自由人」とみなす自らの図式に縛られているように見える。

第二章では、戦時中から戦後にかけて中世研究をおこなった禅文化史家、芳賀幸四郎をとりあげている。芳賀は高等師範時代にマルクス主義に近づいて退学処分となり、文理科大学卒業後、赤化した学生を教導する国民精神文化研究所の研究生となったものの、国体の本義から逸脱したとされていた室町文化の研究に取って取り組むとともに、臨済宗の積宗活に師事して禅修行に打ち込んだ人物だ。芳賀は、「休が応仁の乱以後の混乱時代に破戒を重ね、性的な漢詩を次々に作ったことに注目し、これを国家主義から一転した戦後の状況と重ね合わせ、休に

近代を感じると述べている。これは、戦争と戦後の混乱期を体験した戦後知識人すべてに共通する面だ。

第三章は、「休が矛盾に満ちた人物であることを認め、「風流ならざるところ、また風流」であるような生き方を貫いたとする市川白弦の「休像」を検討している。大学時代の師であった小笠原秀実の影響でアナキストとなった白弦は、西田哲学に惹かれつつ「絶対無の場所」の論理を、「もっとも深い意味における民主的な自由連合の場所の哲学」となるべきだったと批判した。その観点から、社会を痛罵した「休」と向かい合い、単に賞賛するだけでなく、「休は「王孫の自負」を有していたことも指摘し、「自分自身の虚偽、虚栄、名譽心をまともに見ずえて、たじろがなかったところ」に面目があるとしている。

この白弦が反論したのが、「休を『保守反動のイデオログ』と断じた桜井好朗の論文、「乱世の狂気——休宗純における政治と美学」だ。休は結局は王孫であって庶民の側に立つことはなく、王政復古を願っていたとする桜井論文に対して、白弦は「休の保守性を認めたくなくて、王政復古の熱望が挫折したために風狂に奔ったのではないと論じたことを著者は紹介している。ここで奇妙なのは、桜井の議論はかなり屈折したものであって、「休に惹かれていればこそ、失望させられる面について強く批判するといった性格が見られるにも関わらず、著者は、白弦もかなり同意せざるをえなかった問題提起をした桜井について詳しく検討せず、もっぱら白弦の反論についてのみ論じて

いることだ。しかし、本書では触れられていないが、桜井は後に『日本名僧論集 一休・蓮如』（吉川弘文館）を編纂した際、芳賀の論文、自身の論文、それに対する白弦の批判論文を収録しているうえ、解説では、検討が不十分なまま古人を「反動」と決めつけた自分の思い上がりや白弦に指摘されたとし、問題にするなら一休の差別観念をとりあげるべきだと白弦が提言したのは妥当であり、我々はその反省が不十分だったと自省している。桜井はなかなか懐が深い人物なのだ。

実は、一休の差別観念を詳細に追求していないのは、その点を問題にした白弦も同様だ。白弦が尊敬した小笠原秀実の弟は、ハンセン病（癩病）患者を隔離することに反対して患者救済に努めた医師、小笠原登であって、秀実も助力していた。著者は白弦の経歴について説明する際、この点を重視して詳しく紹介しておりながら、一休が兄弟子の養父のことを「癩児」と罵ったことについて真っ向から取り組もうとせず、また、桜井がどのような背景で様々な批判をしたかについて検討していない。「戦後思想史から見る禅文化」という点から云えば、この桜井や、それ以外に一休を批判した者たち、たとえばマルクス主義歴史学の立場から批判した学者たちも取り上げ、その背景を明らかにすべきではなかったか。

著者は、本書では利録や芳賀や白弦、そして戦後を代表する禅宗史研究者であった柳田聖山の一休観をとりあげているが、このうち利録と芳賀は熱心に参禅した居士であり、白弦と聖山

は臨済宗の寺の出身であって、臨済宗が創設した花園大学の教員だった。つまり、彼らは一休の矛盾した点、問題点には触れるものの、基本は一休好きであって高く評価した禅宗関係者ばかりなのだ。その点は、宗門の間ではないものの、禅宗の研究、とりわけ一休の研究者であって一休自身や一休を評価した白弦などに共感を抱いている著者も同様だろう。

そのためか、小笠原秀実と交流があったやくぎの千本組の組長、かつアナキストであって映画の仕事に転じ、参禅もしている白弦とも交流があった興味深い人物、笹井末三郎について偏った扱いをしている。著者が引用している柏木隆法の労作、『千本組始末記—アナキストやくぎ 笹井末三郎の映画渡世』（平凡社、二〇一三年）が載せている白弦の思い出話によると、天竜寺の稲葉心田に師事していた笹井は、稲葉が一休の話を持ち出すと「僕は一休ほど強い意志を持つことができない」と語り、愚童や白隠については「感じるものがない」とし、良寛などは嫌いだと述べ、「僕が死ぬ時は沢庵のごとくありたい」と言ったという。沢庵はすべてに絶望し、一人の弟子も認めずひっそり死んだ人物だ。

著者はこれについて、「中世の乱世を生き抜いた一休は、また近現代の乱世を駆け抜ける「渡世人」たちを魅了する像として現れたのである」と述べ、「白弦もまた同様であった」と説いている（二五一頁）。しかし、笹井は「一休に魅了された」とは述べていないうえ、きわめて独自の存在であった笹井以外の

「渡世人」たちが一休に魅了されたことはどこにも書かれていない。つまり、著者は、乱世を自由に生きた一休なればこそ、

戦中戦後の混乱期を生きたアウトローたちを魅了したという図式を先行させ、そうした者たちの系譜に笹井を組み入れたのだ。かつて、林達夫は「思想のドラマツルギー」での久野収との

対談で、義兄である和辻哲郎が「尊皇思想とその伝統」を書いた際、尊皇思想が弱い時期についても一人か二人を連れてきて前後をつなぎ、伝統があると言うのは、「綱渡りか曲芸のように思えます」と率直に述べるところ、和辻は黙っていたと語っていた（五八頁）。著者のこの『語られ続ける一休像』は、戦後の禅研究史の一側面を明らかにするきわめて貴重な検討がなされているが、「戦後思想史から」の考察とは言いがたい。何燕

生氏の有益な書評（『宗教研究』第四〇三号、二〇一三年六月）も、副題の「戦後思想史」という語を問題とし、日本思想史研究では本書がとりあげている四人の知識人を思想史研究の対象としてみなしていないと指摘している。本書の内容からすれば、「戦前・戦後の混乱期を生きた知識人たちによる近代的な一休像の発見」といった方向の題名・副題が適切ではなかったか。

なお、著者は魅力あふれる人物である笹井末三郎について述べる際、柏木の伝記本をあげているのだから、白弦に惹かれながら白弦のことを「ガンコジジイ！」と断じた柏木「市川白弦随聞記」（『福神』第一七号、二〇一四年）についても紹介し、本書で紹介した白弦とは異なるイメージをも提示してほしいかっ

たところだ。

第四章では、臨済宗の貧しい寺に生まれ、戦時中は徴兵検査に落ちて出征できず、宗門学校でも鬱屈した日々を過ごし、軍国主義から戦後になって一転した節操のない長老たちに反発して宗門から離れたものの、臨済宗が創設した花園大学の教員となり、中国初期禅宗研究の世界的権威となった柳田聖山の一休観を取り上げている。著者は、戦後の禅宗史研究の展開を概説しながら、柳田が一休のことを、「宗祖」を敬愛し、墮落した体制（宗門）に反発しながら宗門改革をもたらすには到らなかったと評したのは、柳田自身のあり方と重なるものであり、柳田が良寛に関心を持ち始めたのもそうした姿勢と無関係ではないと説いている。

一休は宗門の外にありながら自分こそが最も禅をつかんでいるという自覚を持っていたとする柳田の一休像は、宗門の外にありながら学問によって禅を説明しようとした柳田自身の姿と重なる著者はとらえる。そうした一休像を学問的検討と禅そのものへの直参によって明らかにしようとした柳田の追求は、参禅しつつ哲学に励む京都学派の一人である久松真一の影響を受けたものであり、また学問と禅の参究という面で「あるときは師と仰ぎ、あるときは魔と呪った」という鈴木大拙がなしえなかったほど、一休や白隠や良寛に肉薄しようとする苦闘でもあった、というのが著者の見解だ。

著者はこの章の最後で、柳田が訳注という形で取り組んだ一

休の漢詩を含めた五山文学が代表するように、日本では墨跡・絵画・庭園・茶など様々なものが禅宗と結びつき、「禅文化」なるものが形成されたことをどう評価するかが議論になっていくという。そして、この問題は、中国禅から日本禅への文化史的影響関係をどのように研究し得るかという重要な問題につながると説いているが、「禅と日本文化」という図式の先蹤について論じたこともある評者としては、本書の副題を「禅後思想史からみる禅文化の諸相」とするのであれば、著者はこの問題を中心にすすめるべきだったと評さざるを得ない。

「補論」は、これまでの「一休像」の検討と異なり、自らの禅宗研究の成果に基づきつつ、一休の実像に取り組みようとしたものだ。臨済が亡くなる際、自分の没後、「吾が正法眼蔵を滅却することを得ざれ」と説き、弟子の三聖の境地を試したところ、三聖が一喝したため、「わしの正法眼蔵が、こんな瞎驢辺（目が見えない驢馬のところ）で滅却するとは」と言って亡くなったとされておられ、柳田はこれを、「臨済は弟子に絶望して死んだ」と解釈した。しかし、著者は、これは「抑下の托上」すなわち、けなしながらも実は認めるという禅宗のパターンと見る。一休がこの「瞎驢辺」で「滅却」するという表現をしはしば用いていたのは、臨済の正伝が実は「瞎驢」である自分がきちんと受け継いでいると主張するためであり、この語が弟子が描いた一休の頂相にも記されているのは、「興ってこそ滅し、滅してこそ興る」という精神が臨済から一休へ、そして弟子へ

としっかり法灯が伝えられているということだろうと推測するのだ。

しかし、そうだろうか。三聖の一喝は、あまりにもお約束通りの対応にしか見えぬ、実際、三聖には黄蘗や臨済に匹敵すると思われるような言葉は伝えられていない。一休の弟子たちについても、一休に匹敵したり、超えたりするほどの力量の持ち主はいなかった。この前後の著者の議論は、個々の文献の記述よりも「興ってこそ滅し、滅してこそ興る」という図式を優先させたものように見える。

最後の「終章」では、近代の知識人たちがいかに伝統を再考したかを探る作業が、日本思想史における西田哲学・大拙禅学を受容史を解明する作業となったのは思いかけないことだったと述べている。確かに、この面は本書の重要な成果の一つだ。著者は、一休は亡国的な風潮に憤りながら酒肆淫坊に出入りし、仏閣を嫌うと述べつつ大徳寺の再建に助力するといった矛盾に満ちた存在であったことを再確認したうえで、そうした矛盾や無力さに直面したのは、戦後体制下の知識人たちも同様だったとする。そして、加藤周一が描く一休像と時代考察を紹介し、一休を解明するにはさまざまな分野の学問からの考察が必要であり、また一休の時代から現代に到る思想史・文化史の検討を踏まえた「一休学」が必要であると述べ、考察をしめくくっている。

以上のように、本書は、近代における一休像の変化が、禅宗

研究の歴史、また時代思潮の変化といかに連動しているかを示している。著者なりの図式を先行させた点がしばしば見られるが、多くの面で通説の再考をうながす提言がなされており、日本の禅宗、その研究史、また戦後思想史の一側面に関する研究として、刺激的な試みとなっていると言えよう。(一)〇二一年七月刊、A5版、三七六頁、五八〇〇円＋税、ベリかん社)

Michihiro Ama

The Awakening of Modern Japanese Fiction

: *Path Literature and an Interpretation of Buddhism*

大澤 絢子

告白的で懺悔的。暁鳥敏(一八七七―一九五四)の『歎異抄』⁽¹⁾ 読解を思想史研究者の子安宣邦はこう評した。その上で、「親鸞が現在にいたるまで近代日本でくりかえして〈文学的〉主題になることの始まりは、暁鳥の〈告白〉的で〈懺悔〉的な『歎異抄講話』にあると聞いて間違いない」と断言する。内省し、自己を語る営みが、暁鳥やその師である清沢滿之(一八六三―一九〇三)を中心にも広まり、周囲の青年や作家たちにも影響を与えたという事実は、近代仏教研究に取り組み者にとってもはや常識となりつつあるかもしれない。

だが、近代文学研究においては事情が異なる。「私」の体験や事実を赤裸々に語る私小説に現れた告白や懺悔をめぐる宗教の問題は、キリスト教の文脈から論じられる傾向にあるからだ。加えて仏教文学研究では、宮沢賢治や岡本かの子など一部の作家の信仰や仏教の知識を論じたものを除いて、明治以降の作家の作品が取り上げられることは稀である。⁽²⁾

そうした現状において本書は、自我と告白を焦点に日本の近代文学と仏教の架橋を試みた挑戦的一冊だ。主に登場するのは、夏目漱石(一八六七―一九一六)に田山花袋(一八七二―一九三〇)、志賀直哉(一八八三―一九七二)ら、近代日本を代表する作家と、漱石の娘婿で寺院出身の松岡譲(一八九一―一九六九)そして、近代日本仏教の象徴的存在である清沢と暁鳥である。⁽³⁾

本書の構成は次の通りである。⁽⁴⁾

序章 (Introduction)

第一章 学問分野の分断と本研究の概念的枠組み (A Disciplinary Divide and the Conceptual Framework of the Present Study)

第一部 告白的で宗教的実践としてのパーソナルフィクションの執筆 (Writing Personal Fiction as a Confessional and Religious Practice)

第二章 在家仏教の実践者としての近代日本の作家たち (Modern Japanese Writers as Lay Buddhist Practitioners)

近代仏教

第 30 号

2023年 5月

〈追悼 吉永進一氏（一九五七～二〇二二）〉	
みんなの吉永進一	林 淳 (1)
「あいだ」のオカルティズム	碧海 寿広 (8)
〈日本近代仏教史研究会三十周年特別企画〉	
「近代仏教研究の過去と現在」の趣旨	近藤俊太郎 (13)
第 I 部 座談会	
日本近代仏教史研究会三十年のあゆみ	福島栄寿×大谷栄一×ブレニナ・ユリア (16)
第 II 部 研究発表	
近代日本仏教史における「信仰」の構築	
— 宗教概念研究を超えて	吳 佩 遥 (47)
近代仏教の「儀礼」をいかに再現するか	武井 謙悟 (59)
近代（日本）仏教は本当に「戒律」を喪失したか	
— 戒律言説研究からの新たな展望	亀山 光明 (71)
コメント「領域と時代の架橋をめざして」	松金 直美 (85)
コメント「近代仏教と伝統仏教」	碧海 寿広 (91)
〈論 文〉	
吉田久一と家永三郎—近代仏教史と「否定の論理」	松岡 佑和 (97)
明治期琉球における第三次真宗法難事件と小栗憲一	川邊 雄大 (125)
加藤咄堂の教育勅語論における仏教と道徳の位相	
— 涅槃論を中心に	山口 陽子 (163)
千崎如幻の前半生と北米開教—一九三〇年代以前を中心に	末村 正代 (189)
〈報 告〉	
近藤俊太郎『親鸞とマルクス主義—闘争・イデオロギー・普遍性』を読む	
— 著者を迎えての合評会	名和 達宣 (214)
信仰・研究主体の歴史的立場と否定性を問う仏教史学	
— 近藤俊太郎『親鸞とマルクス主義』を読解する	繁田 真爾 (217)
語られなくなる親鸞？	
— 近藤俊太郎『親鸞とマルクス主義—闘争・イデオロギー・普遍性』	
を踏まえて	宮 部 峻 (222)
近藤俊太郎『親鸞とマルクス主義』における	
問題意識／分析視座／方法論をめぐって	井之上大輔 (226)
リブライ—新たな対話のはじまり	近藤俊太郎 (230)
総括	大谷 栄一 (233)
〈書 評〉	
『新刊紹介』	
2021年10月～2022年9月	『近代仏教』編集委員会 (284)
〈彙 報〉	
	(289)

日本近代仏教史研究会

KINDAI BUKKYŌ

Modern Buddhism

No. 30

In Memory of YOSHINAGA Shin'ichi (1957-2022)

Everyone's Yoshinaga Shin'ichi	HAYASHI Makoto (1)
In-between Occultism	ŌMI Toshihiro (8)
Special Event	
Purpose of Symposium "The Past and Present of the Study of Modern Buddhism"	KONDŌ Shuntarō (13)
I Roundtable	
Thirty Years History of the Society for the Study of Modern Japanese Buddhist History	FUKUSHIMA Eiju, ŌTANI Eiichi, and Yulia BURENINA (16)
II Research Presentation	
The Construction of "Faith" in Modern Japanese Buddhist History:	
Beyond Scholarship on the Concept of Religion	WU Peiyao (47)
How to Represent "Ritual" in Modern Buddhism?	TAKEI Kengo (59)
Did Modern Japanese Buddhism Really Abandon Monastic Precepts?:	
New Genealogies of Buddhist Discipline	KAMEYAMA Mitsuhiro (71)
Response: In Hopes of Bridging the Gap between Eras and Areas of Specialization	MATSUKANE Naomi (85)
Response: Buddhist Modernism and Local Traditions	ŌMI Toshihiro (91)
Articles	
Yoshida Kyūichi and Ienaga Saburō: The Logic of Negation and Modern Japanese Buddhist History	MATSUOKA Hirokazu (97)
Oguri Ken'ichi and the Third Jōdo Shinshū Repression in Meiji-era Ryukyu	KAWABE Yūtai (125)
Katō Totsudō and the Imperial Rescript on Education: Buddhism, Morality, and Nirvana	YAMAGUCHI Yōko (163)
Pioneer of American Zen Practice: The First Half of Nyogen Senzaki's Life and His Activities before the Pacific War	SUEMURA Masayo (189)
Review Workshop Reports	
Kondō Shuntarō's <i>Shinran and Marxism</i> Review Workshop:	
Opening Remarks	NAWA Tatsunori (214)
A Buddhist Historiography that Questions the Historical Positionality and Negativity of Its Subject in Terms of Faith and Academia: Reading Kondō Shuntarō's <i>Shinran and Marxism</i>	SHIGETA Shinji (217)
Is Shinran No Longer Spoken Of?: An Analysis Based on Kondō Shuntarō's <i>Shinran and Marxism</i>	MIYABE Takashi (222)
Methodology, Analysis, and Perspective of Kondō Shuntarō's <i>Shinran and Marxism</i>	INOUE Daisuke (226)
The Beginning of a New Discussion	KONDŌ Shuntarō (230)
Summary	ŌTANI Eiichi (233)
Book Reviews	
October 2021 - September 2022	Editorial Committee (284)
Announcements	(289)

2023

Society for the Study of Modern Japanese Buddhist History
Tokyo, Japan